

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Three Governesses : Becky Sharp, Jane Eyre and Agnes Grey

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新野, 緑, Niino, Midori メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1649

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



三人のガヴァネス

—ベッキー・シャープ, ジェイン・エア, アグネス・グレイ—

新 野 緑

I. ガヴァネスとは何か

英国小説、とりわけ十九世紀の小説には、ガヴァネスと呼ばれる主に住み込みの女家庭教師が頻繁に登場し、物語に重要な役割をになう。レイディ・ブレッシングトンの『ガヴァネス』(1839)を皮切りに、サッカレーの『虚栄の市』(1847—8)やシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(1847)、アン・ブロンテの『アグネス・グレイ』(1847)、そしてウッド夫人の『イースト・リン』(1861)など、ガヴァネスをヒロインとした小説が数多く書かれているが、男性の家庭教師を主人公としたものはほとんどみあたらない¹⁾。これは英国に特殊な状況で、たとえばフランスでは、『新エロイズ』(1761)や『赤と黒』(1830)など男性家庭教師を主人公とする小説があるのに、ガヴァネスを描くものはずぐには思い浮かばない。女子教育が主に修道院を中心に行われたことも影響しているだろうが、このことから、ガヴァネスがイギリスに特殊な職業で、とりわけ、十九世紀において様々な形で人々の注目を引く話題性に満ちたものであったことが知られる。

もっとも、英国に男性の家庭教師がいなかったわけではない。上流階級の子弟の教育は、もともと学校ではなく家庭で、男の家庭教師によって行われるのが一般的で、『オックスフォード英語辞典』(以下 *OED*)には、すでに1398年に、「チューター (tutor)」についての用例がある。しかし、男子の教育機関の歴史もまた古く、十三世紀にはオックスフォード、ケンブリッジの大学が、十五世紀にはパブリック・スクールが設立されて、上流、中流の

男子の教育は序々にこうした教育機関の手に委ねられた。いずれにしても、その多くが大学を出て専門的な知識を持つチューターの社会的地位や雇用条件は、比較的安定した形で推移したといえよう。²⁾

一方、女性教師という意味で「ガヴァネス (governess)」という言葉が用いられた最初の例は、「チューター」よりも三世紀も遅い1712年 (OED) だが、これも、それ以前に女の家庭教師がいなかったというのではなく、主に家庭に住み込んで子供達の教育に携わる女性の家庭教師は、チューターと同じく中世から存在していた。それまで「ミストレス (mistress)」と呼ばれていた女性教師を新たに「ガヴァネス」と呼ぶようになったのが1712年なのである。³⁾

ではなぜこの時期に、女性の教師にかぎって、従来の「ミストレス」に代わって「ガヴァネス」という言葉が新たに用いられるようになったのか。OEDの「ガヴァネス」の用例を見れば、その理由を説明する興味深い記述がある。それは1759年の『年鑑』の一節で、「学校の女教師はガヴァネスと呼ばれた。なぜなら、ミストレスという言葉には下品な響きがあるからだ」という。ここでは、「ガヴァネス」も「ミストレス」も、女性の教師全般を指し、学校の教師と家庭内で子供を教育する家庭教師との区別はまだ明らかにされていない。いずれにしても、従来用いられていた「ミストレス」という言葉には、「女性教師」の他に「愛人」という意味もあって、子供を教導く人物がいかかわしい連想を伴う名で呼ばれることの不都合がこの時代に意識されはじめたために、新たに「ガヴァネス」という呼び名が用いられるようになったのだろう。裏返せば、上流や中流の家庭の雇い人でありながら、一般に良家の出で才芸にすぐれていた女家庭教師が、その家の主人や息子達の「愛人」あるいは「恋人」となる可能性が、この頃、現実存在し、その不都合な事実がかなり多くの人々に意識されてきたことが推測される。

さらに一層興味深いのは、これ以後、女性の教師を指すのに、「ミストレス」という言葉から「ガヴァネス」に代わるのではなく、十九世紀頃を境に、

「ミストレス」が学校の教師，そして「ガヴァネス」が家庭教師というように，それぞれが異なる意味領域を示すものとして独立した用法を確立していったことだ。そのことは，従来曖昧であった学校の教師と家庭教師とが，この時期に何らかの理由で明確に区別される必要性が生じてきたことをものごたる。しかも，従来使われていた「ミストレス」が学校教師の意味で定着し，新たに使われるようになった「ガヴァネス」が家庭教師を指すようになったということは，十九世紀初頭のこの時期に，女家庭教師がそれまでとは違う新しい話題性を獲得し，そのために，漠然と女教師一般を指していた従来の「ミストレス」とは異なる新しい呼び名を必要としたということを示すだろう⁴⁾。

実際，英国社会において，女家庭教師が従来とは異なる新しい境遇に置かれ，それに伴う様々な問題が出てくるようになったのは，十九世紀になってからである。川本静子によれば，英国において女性の家庭教師が姿を現すのは十四世紀頃で，宮廷の慣習に通じ才気のある伯爵や男爵の妻が王族の家に抱えられ，宮廷で絶大な権力を握った⁵⁾。チューダー王朝の時代に初めて有給の女家庭教師が登場，その雇用も，王族から上流社会一般へと拡大し，さらに，摂政時代には，上流階級に限られていた女家庭教師の雇用が，一家の上品さ (respectability) を図るひとつの尺度として裕福な中産階級にまで広がる。そして，この女家庭教師需要の拡大と共に，その境遇にも大きな変化が現れた。

上流階級の子女にレイディにふさわしい上品な嗜み (これを accomplishments と呼び，具体的には音楽，声楽，ダンス，絵画，フランス語，その他の基礎教科，テーブル・マナーなどだった) を身につけさせる女家庭教師は，雇い主と同じ良家の出身者で，十九世紀までは，その身分にふさわしい敬意を払われ，雇い人ではなくむしろレイディとして扱われるのが常だった。十九世紀に入って女家庭教師の需要が上流階級から中産階級に広がった後も，子供を教育するガヴァネスの仕事は，それが当時の女性の標準像と考えられ

た中産階級の母親の仕事に類していたために、レイディにとって恥ずかしくない唯一の「上品な」仕事とみなされ、父親の死や破産によって困窮した独身女性や未亡人など、自活の必要に迫られたジェントルウーマンは決まってこの職を求めたのである。ジェントルウーマンの零落は、1830年代、経済の急速な膨張にビジネスが釣り合わずに銀行の倒産が相次いだために激増した。しかも、この時代には女性の数が男性を圧倒的に上回っていたため⁶⁾、自分を扶養してくれる配偶者を見つけれないいわゆる「余りものの女 (odd woman)」が増え、ガヴァネスをめぐる市場は、その需要が広がったにもかかわらず、供給過多の状態に陥ったという。しかも、家庭教師の職は、零落したジェントルウーマンに加えて、社会的な上昇を目指す商人や農場経営者の娘によっても求められるようになったのだから、ガヴァネスという存在がこの時期に様々な社会問題を引き起こすことになった。

ガヴァネスは、生まれ、作法、教育の点で雇い主と対等なジェントルウーマンでありながら、経済的理由で自活を迫られた婦人が就く職業で、その出自を尊重してレイディとして扱われるのが従来の社会的な約束だった。しかし、一方では、レイディは働かず男性の係累によって扶養されるものだという文化的ルールがあり、とりわけ、富を蓄えた中流階級が上流階級を真似て次々と家事使用人を雇って妻や娘を家事から解放していった十九世紀においては、経済的な富を持たず有給の職につくガヴァネスは、「レイディ」とは見なしがたいという考えもあった。そうした見解は特にガヴァネスと同じ雇い人でありながら、待遇（もっとも賃金のうえでは差はなかった）の上で一線を画されていた他の家事使用人との軋轢において、明確な形をとることになる。いずれにしても、十九世紀において、ガヴァネスは、その社会的地位をめぐる、当時のジェントルウーマンの概念を揺るがす大きな矛盾をその存在自体の内に抱えており、そこに、女子人口の増加や社会的変動によるジェントルウーマンの困窮、婦人の有給雇用に対する偏見や女子教育の劣悪さといった当時の女性をめぐる諸問題が絡まって、大きな社会問題となったので

ある。

1841年に発足した「ガヴァネス互恵協会 (Governess's Benevolent Institution)」は、女家庭教師救済のための最初の組織で、十九世紀を通して活発に活動することになる。こうした慈善事業と並行して、ガヴァネスの経済的立場を改善し、それにふさわしい資格を得させるために、女子教育の見直しが叫ばれ、1848年にクイーンズ・コレッジ (Queen's College for Women) が開校 (もっともここでの教育水準は未だ低く、後の中等学校程度のものであったといわれる)、それが、フェミニズム運動と連動して、女子教育全体の改革へと進む⁷⁾。しかし、こうしたガヴァネス救済の努力は、女家庭教師を真に尊敬されるべき資格を持った専門職として確立し、それにふさわしい正当な賃金を確保するには至らず、むしろ、ガヴァネス職を通じて社会的上昇を望む育ちのよくない少女たちを排除して、真のジェントルウーマンを保護する方向に動いていったようだ。ガヴァネス雇用の機会を広げる目的で行われた植民地への移住奨励 (1849年に移民扶助国民協会 (National Benevolent Emigration Society) が作られ、次の十五年間に教育ある婦人の移民協会 (Educated Women's Emigration Society) などの組織も発足) も、同様の効果しかなく、ガヴァネス問題の根本的解決は行われないうまま、十九世紀の末には、優れたデイ・スクールや女子のパブリック・スクールの増加にともない、ガヴァネス職自体がしだいに不要のものとなり、それに伴って、女家庭教師をめぐる問題も消滅してゆくのである。

十九世紀の半ばをピークにガヴァネスの待遇改善をめぐる行われた様々な議論、運動は、ガヴァネスという存在が社会階級やジェンダーの境界線上に位置しており、そのために当時の社会の様々な矛盾を露呈するものであったことを明らかにする。その意味で、古くから教育制度が確立し、ひとつの専門職としてその獲得した知識に見合った賃金、待遇を保証された男性の家庭教師にはない様々な問題が、女家庭教師という存在をめぐる浮かび上がってきた。そして、それこそが、既にみたように、「ガヴァネス」という言葉

が、「チューター」とは異なる複雑な意味の変遷を持ちえた理由でもあるだろう。

II. ガヴァネスはピカロか？ —ベッキー・シャープ

このように問題性のあるガヴァネスは、英国小説においてどのように描かれ、どのような役割を果たしているのか。ここでは特に、サッカレーの『虚栄の市』とシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』、そしてアン・ブロンテの『アグネス・グレイ』の三作を取り上げてみよう。女家庭教師をヒロインとするこれらの小説は、いずれも1847年、すなわち、英国においてガヴァネス問題が取り沙汰され、「ガヴァネス互惠協会」の設立からクイーンズ・コレッジの設立へと女家庭教師の待遇改善のための運動が活発に動きはじめた時期に出版されたもので、当時のガヴァネスをめぐる英国社会の雰囲気⁸⁾を最もよく表していると考えられるからである。

『虚栄の市』はロンドンのチズウィック・モールにあるピンカートン女史の女子寄宿学校の描写で始まる。寄宿学校での六年間の教育を終えたアミアリア・セドレイが今まさにそこを去ろうとしていた。勘定書とともに手渡された母親宛ての手紙から、当時の女子教育の実態が明らかとなる。

奥様、モールでの六年間の教育の結果、誇りと喜びをもって、アミアリア・セドレイ嬢をご両親のもとへお届けいたします。お嬢様はお宅の洗練されて上品な方々の中で、しかるべき位置を占めるのに遜色のない淑女です。若い英国の令嬢が身につけるべき美徳の数々、そうした女性の生まれや地位に相応しい嗜みの数々は、愛すべきセドレイ嬢には何一つ欠けてはおられませんまい。勤勉で従順でいらしたので教師達は皆お嬢様を可愛がり、すばらしく優しい気質でいらしたので友人たちは年上の者も若い者もみな魅了されておりました。

音楽、ダンス、正字法、あらゆる種類の刺繍や編み物において、お友達のすべてが羨む域に達していらっしゃるのがお分かりになるでしょう。

地理学はまだまだご勉強の余地があります。また、ここ三年間は毎日四時間背骨矯正板を心して欠かさずお使いになることをお勧め致します。そうすれば、上流の若い令嬢のすべてになくはないあの威厳のある立ち居振る舞いをきつとわが物となさるでしょう。⁹⁾

すなわち、当時の上流、中流階級の女子教育は、ジェントルウーマンにふさわしい美德と嗜みを身につけさせるためのもので、必要な「才芸」として音楽、ダンス、正字法、刺繍、編み物、地理学、立ち居振る舞いなどが挙げられている。教科の列挙の仕方から明らかなように、体系的な学問というよりは、互いに関係のない雑多な知識や技術が雑然と教え込まれていた。アミアリアの美德として強調される「勤勉」や「従順」、そして「優しい気質」は当時理想とされた女性の典型的特質であることから、結局は、女子の教育が専門的な知識の伝授よりも上品な有閑婦人の育成を目標としていたことが分かる。これは、家庭教師ではなく寄宿学校での教育の内容を示したものだが、没落したジェントルウーマンであれ、上昇を求める下層中流階級の女であれ、ガヴァネスの多くはこうした教育を受けた者達だから、彼女達が行った教育も同じようなものだったろう。

実際、小説には、裕福なロンドン商人の娘アミアリアと並んで、寄宿学校を出てまさにガヴァネスとして赴任しようとする娘、レベッカ（ベッキー）・シャープが登場する。レベッカの父親は売れない画家で、彼女はオペラの踊り子だったフランス人の母親を貴族の出と偽っていた。母親仕込みのパリのフランス語を見事に話すレベッカは、十七歳で孤児になると、ピンカートン女史の学校の年季契約生となって、フランス語を話す代わりに、寄宿料を免除され、年数ギニーで学校の教師達から知識をかき集めることを許される。レベッカの真実と偽りの二つの履歴は、没落したレイディと社会的上昇を狙う下層の娘という当時のガヴァネスの二つの対照的な出自を読者に意識させたいうえで、レベッカを後者、すなわち成り上がりを狙う危険な野心家と定義することになる。

芸術家として放埒な生活を送る父親の芸術家仲間の中で育ったレベッカは、早熟な娘で、ピンカートン女史の学校の規則ずくめの生活や、塾長の虚栄、生徒の愚かさ、教師の石頭になじむことができない。彼女の不満に耳を傾けてみよう。

「伯爵の孫だからって、あの娘ったらなんて気取ってるんだろう（中略）あのクレオールに皆なんてぺこぺこへつらっていることか。十万ポンド持っているからってさ。財産はなくとも私のほうがあの娘より千倍も頭もよくて魅力的だし、名門の出じゃなくても上品さじゃ伯爵の孫にひけをとらない。なのに、ここではだれも私を歯牙にもかけない。でも、お父さんの家にいた頃、男たちは華やかな舞踏会もパーティーもすっぽかして私と一晩一緒に過ごそうとしたじゃないの。」（VF, 51）

人々から尊重されるレイデイが、知性や気性の良さ、優美さや上品さといったジェントルウーマンとしてのあるべき実体を伴わず、単なる血統や財産によって計られる十九世紀社会の矛盾を、レベッカの言葉は鋭く指摘している。自分はこうした令嬢たちに頭も美貌も劣らないと彼女は言うが、それはただの自惚れともいえまい。彼女は学校で提供された科目すべてをたちまち習得する才知と技量を備え、オックスフォード出身の若い牧師クリスプ氏をひと目で恋の虜にする魅力も備えているのだから、彼女の怒りは、ある意味では正当なものだ。しかもそれは、ひとりレベッカのみが感じた不満ではなく、ブルジョワの台頭とともにジェントルウーマンの輪郭が曖昧になりつつあったこの時代にあって、雇い主と同等あるいはそれ以上の知識や教養を備えながら地位や財産の点で決してレイデイとはみなされなかった女家庭教師が一樣に感じた矛盾でもあった。

内実においてはレイデイでありながら、地位や財産を伴わない彼女達がレイデイとして正当な扱いを受ける術はただ一つ、そうした社会的地位を備えた金持ちの夫を得て、その内実にふさわしい地位を得ることだ。家庭教師として赴任する前にアミリアの家に招待されたレベッカは、アミリアの十二歳

年上の兄で、東インド会社のベンガル支局で、収税吏として働くジョゼフ・セドレイが独身と知るや、早速誘惑しはじめる。このレベッカを、語り手は次のように弁護してみせる。

たとえ、レベッカ・シャープ嬢が心の中でこの太った伊達男をわが物にしようと決心していたとしても、ご婦人がたよ、彼女を責めるにはあたらぬ。というのも、婿捜しという仕事は、大抵の場合、若い娘らしい慎みによって、母親に委ねられるものだが、ご存じのとおりシャープ嬢にはこうした微妙な事柄を彼女のために手配してくれる親切な親もなく、また自分で夫を捕まえないければ、その厄介な仕事を彼女に代わって引き受けてくれる人もこの広い世間にいないのだから。(VF, 57)

金銭的、社会的に少しでも条件のよい夫を得ようとするレベッカの上昇指向は、上流階級の令嬢たちにも共通するもので、ダンスも音楽も美しい身のこなしも、令嬢たちが学校やガヴァネスから身につける「嗜み」は、結局は良い夫を獲得したいという「結婚の野心」を実現するためというのである。もちろん、語り手は、下層出身の女家庭教師が結婚によって成り上がることを、肯定しているわけではない。ピンカートン女史の妹ジェマイマが姉の反対に逆らってまで卒業のはなむけにレベッカに贈ったジョンソン博士の辞書を、そのジェマイマの目の前で馬車の窓から投げ捨てる小説冒頭のエピソードが象徴的に示すように、レベッカは小説の始めから人間の情愛を欠いた危険な女として、常に批判的に描かれる。しかし作者は同時に、レベッカが反発し、それに挑戦してゆく社会の在り方自体も、彼女と同じく、あるいは彼女以上に批判されるべきものとして、その欺瞞を容赦なく暴いてゆくのである。

ものぐさで、自意識過剰で、愚かな虚栄心に満ちたジョゼフを、レベッカは持ち前の才知と魅力でやすやすと虜にし、ジョゼフの父親セドレイ氏にもうまく取り入る。おかげで、二人の恋愛が取り沙汰された時、彼は、一文無しの画家の娘を嫁にすることに難色を示す妻を次のように諭すのである。

「ジョスは好きな女と結婚させよう（中略）わしにはどうでもいいこ

とだ。あの娘は財産がないが、お前だって財産はなかった。あの娘は氣立てがよく、利口そうだから、ひよっとするとあいつにまっとうな暮らしをさせるかもしれない。いいかいおまえ、あの娘のほうが黒人の嫁をもらって、マホガニー色の孫が一ダースできるよりましじゃないか。」
(VF, 89)

セドレイ氏は元株式仲買人の事務員で妻は雑貨商の娘、財産とて結婚当初五百ポンドしかなかったが、株で成功して現在の財産を築いた成り上りだった。彼は、息子が当世風の伊達男を気取り、虚栄心が強く、怠け者で軟弱であることを軽蔑して、将来に期待をかけてはおらず、従って、レベッカをその嫁とすることに反対しなかったのだ。セドレイ氏はいかにも物分かりのよい人物のように見えるが、「黒人の嫁をもらって、マホガニー色の孫が一ダースできる」よりもレベッカがましたという言葉は、当時の英国人の人種に対する意識を考えると、彼女の価値を認めているのではなく、むしろいかに氣立てがよく利口な娘であろうとも、財産のない売れない画家の娘で家庭教師である彼女の出自を貶める気持ちが強いいえる。

ともかくも、両親の承諾も得られたのだから、レベッカの結婚は時間の問題と見えた。だが、気の小さいジョゼフはなかなか求婚の言葉を言いだせず、泥酔する始末。翌日、アミアアの許嫁のジョージ・オズボーンが前日の醜態を誇張して話したために、ジョゼフは結婚を諦めてロンドンを去り、レベッカの期待は虚しく外れるのである。注意すべきは、背後にジョージの思惑が働いていたことだ。友人ドビンへの以下の言葉はそのことを明らかにする。

「彼に色目を遣って言い寄っているあのちんちくりんの女学生は何者だ？ くそっ、あの女がいなくても、あの家はもともと十分家柄が悪いんだ。家庭教師も結構だが、僕の義理の姉さんには良家の令嬢になってほしいね。僕は自由な考えを持っているよ。でも、それなりの誇りもあるし、自分の立場もちゃんと知っている。あの女にも身分というものをわきまえてほしいね。」(VF, 96)

ジョージの家も裕福な商人で、今はアミアリアの家を凌ぐ繁盛ぶりだが、かつては彼女の父セドレイ氏に世話になり、引き上げてもらった恩もある。ところが、父親の財力で将校の地位を買い、「紳士」の仲間入りをした彼は、名づけ親のセドレイを「十分家柄が悪い」といって軽蔑し、義理の姉にはレイディを望み、自身の努力によらずに一層の社会的上昇を得ようと狙っている。こうしたジョージの虚栄心は、ドビンによって「確かに君はいつだって王党派だし、君の家は英国で最も古い家柄のひとつだからな。」(VF, 97)と皮肉まじりにたしなめられる。しかし、ドビンの反応も、密かに心ひかれているアミアリアに対する義侠心からのもので、レベッカを擁護しようとするものではない。縁談が壊れたと知ったとたん、家政婦のブレンキンソップが召使仲間と言う「わたしは、ガヴァネスなんて連中を信用しちやいないよ、ピナー。あの連中はレイディに成り上がったつもりで偉ぶってるけど、給料ときたらあんたや私ぐらいしかないんだからね。」(VF, 99)という言葉は、雇い人仲間が女家庭教師に抱いていた感情がどのようなものであったかをも明らかにする。雇い主からも雇い人からもレイディとはみなされず、疑いの目で見られていたガヴァネスの苦境が偲ばれる一節だ。¹⁰⁾ここでも、結局は、ガヴァネスの社会的立場を微妙なものにしているのは、その行動や人格ではなく、金であって、上昇を狙うレベッカ以上に批判の対象となっているのは、金によってすべてを判断し、虚栄心の虜となった十九世紀社会そのものといえるだろう。この小説の表題である「虚栄の市」という言葉は、こうした社会の在り方を象徴的に表すものにほかならない。

セドレイ家を去ったレベッカは、准男爵の屋敷に、後妻が生んだ二人の娘の家庭教師として赴任する。クローリー家は古い名家だが、莊園はさびれ、財政は逼迫していた。クローリー卿の腹違いの姉は独身で、母方の大きな財産を継いでおり、先妻の二人の息子のうち、堅物の長男よりも放埒な軍人のロードンを可愛がって、遺産は次男に譲ると宣言している。レベッカは家庭教師の本業は生徒の「自己教育」に任せて、もっぱら夫捜しに力を入れ、次々

と家族に取り入った末に、次男とこっそり結婚する。クローリー卿には妻がおり、長男には心に決めた女性がある以上、結婚相手はロンドンしかいなかったのだが、彼が相続する老嬢の財産を狙った行為であるのは言うまでもない。ところが、結婚の直後にクローリー卿の妻が死に、後添えにと望まれたレベッカは、より確実にレイディに成り上がる可能性を絶たれたうえに、教区牧師ビュート・クローリー夫人の中傷によって、頼みのクローリー老嬢からも勘当され、財産相続の望みもついでるのである。

以後の物語は、もはやガヴァネスではなく、ロンドン・クローリー夫人としての冒険となるが、彼女は身につけた「嗜み」と、元家庭教師という立場を利用して、世の中をしたたかに生き延びてゆく。ベルギーの連隊では新婚のジョージ・オズボーンを誘惑し、一時はパリやロンドンの社交界で名をなすが、スタイン卿との関係を夫に知られて別居、悪事に手を染めた挙げ句、ジョゼフ・セドレイをたぶらかして彼の死後に多額の保険金を手にいれる。¹¹⁾ このように、レベッカは、小説の始めに示されたとおりの危険な女として、結局終始否定的に描かれる。それはまた、下層の出でありながら、教育を受けてレイディに成り上がろうとするガヴァネスに対する作者の批判を表しているだろう。しかし、この小説で批判の対象となっているのは、成り上がりを目指すレベッカのみではない。彼女が教育を受けるピンカートン女史の学校や裕福な商人であるセドレイ家やオズボーン家、そして地方の名門クローリー家やロンドンの社交界など、彼女が次々と接触してゆく上層階級のすべてが、彼女と同様に金と社会的地位を得ることに汲々とする虚栄心に満ちた患者、つまり「虚栄の市」の住人として一層鋭い批判にさらされるのである。

このように、社会の枠組みからはみ出した人物が、あちらこちらを旅してまわり、社会と接触することによって様々な騒動をまきおこす、そして、そのことによって、既存の社会の矛盾や悪を暴き出してゆくという形の小説は、ピカレスク・ノヴェルの系譜につながるものだ。こうした型の小説は、英国でも十八世紀に流行し、スモーレットの『ローデリック・ランダム』(1748)

やフィールディングの『トム・ジョーンズ』(1749)に加えて、奉公した屋敷の主人の誘惑にさらされながらその貞操の固さが報われて玉の輿に乗る女中パメラの物語や、監獄で生まれ、売春や重婚、窃盗などの罪を重ねたモル・フランダースの手記など、女性に対する教訓譚という形でも試みられた。ピカレスクの枠組みを用いながら、女家庭教師である主人公の結婚と恋愛をめぐる騒動を描く『虚栄の市』は、下層からレイディに成り上がろうとするガヴァネスの上昇指向をモラルに反する危険なものともみなすと同時に、当時の社会におけるガヴァネスが、社会のどこにも安定した場所を持ちえないピカロにも似た存在であることを改めて読者に認識させ、レベッカのような女性を生み出した社会のあり方自体を批判する。

そのことは、レベッカとは対照的ないまひとりのヒロインであるアミリア、裕福な中流家庭に育ち、美貌と教養とレベッカにはない善良さを備えた「家庭の天使」として、当時の理想の女性像を体現する彼女が、父親の破産、怠け者で不実なジョージ・オズボーンとの結婚、夫の戦死、残された息子との貧困生活、そしてドビンとの遅すぎた結婚と、ひたすら不幸な転落の人生を強いられることから明らかだろう。ドビンの愛情に依存しつつも、あくまでも亡き夫の幻影にしがみつこうとする彼女にドビンが語る、

「あなたはとてもいい人だし、確かにできるかぎりのことはしてきたのでしょ。でも、僕があなたに対して抱いているような愛の高みに到達できる人ではなかったのです。あなたよりもっと気高い魂の持ち主ならば、そんなふうにあされ、また愛することを誇らしく思ったでしょうに。」(VF, 776)

という訣別の言葉は、アミリアの欠点を鋭く指摘し、ブルジョワの理想とした「家庭の天使」が、男性の作り上げた虚しい幻影にすぎなかったことを諷するだろう。実際、彼女の善良さは、結局は、他者を表層によってのみ判断してその実体を見誤る愚かさを生み、夫への貞節に固執するあまり、彼女は結果的にドビンの愛情を弄ぶことにもなるのである。二人のやりとりを聞いて

たレベッカが、「あの男はなんて立派な心を持っているのだろう（中略）しかもあの女ときたらなんてひどい具合にそれを弄んでいることか。（中略）もしもあんな夫，心も頭も立派な男が私のものになっていたら，あの大きな足など気にしなかったろうに」（VF, 776-7）と，両者の本質を鋭く指摘することは皮肉である。つまり，アミリアとは対照的な悪女レベッカの方が，ドビンやアミリアの実体を見通す澄んだ目を持っていることになるからだ。しかも，そのレベッカがジョージの不実を暴露して彼女の迷妄を解き，ドビンの真価を知らしめて，彼女をドビンとの結婚に導くことを思えば，この小説において，人間の善悪といった道徳的な価値は，ほとんどその基盤を覆されているようにも思われる。

確かに，物語の最後にドビンと再婚したアミリアには，その善良さにふさわしい穏やかな幸福が与えられる。しかし，夫が娘のジェニーを溺愛する様を眺めて、「私よりもずっと好きみたい」とため息まじりに語る（VF, 797）彼女は，完全に幸福とは言い切れまい。一方，レベッカは親戚縁者から疎まれながらも，クイーンズ・クローリーの領地を継いだ息子小ロードンの仕送りで裕福に暮らし，慈善事業に励む。つまり，彼女もまたその野心をいくらか実現して，したたかに生きつづけるのである。こうして，アミリアとレベッカのいずれにも，運命の上では積極的な価値評価を与えないまま『虚栄の市』の物語は閉じられる。

ピンカートン女史の学校に始まって，ブルジョワ階級や貴族，官吏，牧師，軍人，社交界と十九世紀社会において価値を認められている様々な階級，職業の世界を，成り上がりの女家庭教師とともに覗き見ることで，小説『虚栄の市』は，社会の実体を暴き，ジェントルマンやレイデイを含め，善悪の差異に至るまであらゆる社会的価値を次々と解体する。社会のどこにも安定した場所を持たないガヴァネスの存在は，そうした社会の有り様を暴き出すひとつの触媒の役割を果たしている。あらゆる人々が上昇の野心に燃え，空しい虚栄心に捉えられ，究極的な価値が不在となった社会の在り方，そしてそ

うした世界における人間存在の不安定さこそが、この「ヒーロー（英雄／主人公）のない小説」が読者に提示する問題といえよう。

Ⅲ. 成長する主人公ジェイン・エア

もっとも、下層の出でありながら、教育を受けてレイディに成り上がる女家庭教師の物語は、ピカレスク以外の形も取りえたはずだ。すなわち、ドイツに発祥したビルドゥングズ・ロマンで、主に少年がその未熟さのために挫折を経験しつつ、社会との葛藤や恋愛を通して精神的に成長を遂げ、ふさわしい専門職を得て自立するに至るその物語は、進歩の理想を掲げ、「自助」の精神を称揚し、教育と勤勉による成り上がりを夢見たブルジョワの時代の産物でもある。教育を受けて階級の差を乗り越え、レイディに成り上がろうとする女家庭教師の履歴は、教養小説の形に適合する要素を備えており、しかも、十八世紀に流行したピカレスクよりは新鮮で、時代の雰囲気にも合うにちがいない。実際、こうした教養小説型の物語は、サッカレイのライバルだった人気作家のディケンズが自伝的小説『デイヴィッド・コパフィールド』（1849-50）で、またサッカレイ自身も、『虚栄の市』に続いて出版した『ペンデニス』（1848-50）で試みている。従って、『虚栄の市』において、サッカレイは敢えて古い小説の形を選択したことになる。それはなぜか。この答えは、同じ年に書かれ、同じく女家庭教師を主人公としたブロンテの『ジェイン・エア』を見ることによって考えたい。

物語は、ゲイツヘッドの館で伯母や従兄弟達から疎まれて孤独の内に過ごしたジェインの幼い日の記憶から始まる。踊り子だったレベッカの母親とは異なり、ジェインの母親は、裕福な家に生まれ育ったれっきとしたジェントルウーマンだが、貧しい副牧師と恋に落ち、両親の反対を押し切って結婚、一族から勘当された彼女はすでに階級を下降している。ましてや両親の死後、財産もなく、母方の伯父の未亡人で血のつながりのないリード夫人のやっかいになっているジェインは、召使のベッシーが「もしもあの方に放り出され

たら、あなたは救貧院にいかなければならないんですよ』と言うように、最下層の貧民にも等しく、レベッカと同等あるいはそれ以下の身分といえる。

臨終の夫にジェインの養育を約束したにもかかわらず、厄介者の彼女を疎んじ、虐待する伯母や従兄弟たちに、ジェインは不満をつのらせてゆく。

どうして私は気に入られないのだろう。誰かに好かれようと努力してもだめなのだろう。イライザは、強情で自分勝手だけど大事にされている。ジョージアーナはあまやかされてひどく意地悪で、人のあげ足を取り、傲慢なのに皆にちやほやされている。その美しさ、バラ色の頬、金色の巻き毛が見る人の誰をも魅了し、どんな欠点も帳消しにするらしい。ジョンに逆らう者は一人もいなかった。ましてや罰を加えることなどない。鳩の首をねじろうが、孔雀の雛を殺そうが（中略）。私は過ちを犯すまいとびくびくし、なすべき勤めはすべて果たそうとしたのに、朝から昼まで、昼から夜まで、悪戯でやっかいで、ふてくされて卑劣な子だと言われた。（*JE*, 46-7）

金があるというだけで、人格的な欠点がすべて見過ごされ、誰からもちやほやされるのに、お金のない厄介者の自分は、性悪の子供として蔑まれる。もちろん、成長した語り手のジェインが言うように（*JE*, 47）、彼女がリード家でこうした待遇を得たのは、彼女自身の無知や未熟さのゆえでもあるだろう。しかし、財産の有無が、個人の人格に対する評価や愛情を決めてしまう社会のあり方を、「不正」として、激しく反発するジェインの怒りは、ピンカートンの学校で頭脳も美貌もなんら取りえのない娘たちが、家柄や財産によってもてはやされることに憤慨したレベッカと共通するものだ。レベッカは、人間の肉実として美貌と頭の良さをあげ、性格の問題にはふれないのに対して、ジェインはジョージアーナの美貌を悪徳への補償と見て財産と同等に扱い、人格と対照させている点で違いがある。しかし、いずれにしても、人生の早い段階で、両者が金や地位を全てと考える社会の被害者となり、それに激しく反発していることは確かだろう。二人のヒロインは物語の最初に

同じ位置におかれていることになる。

レベッカの場合、こうした社会への反発が結婚してレイディになるという強い上昇指向を生み出すが、ジェインにとっても、心の中にわだかまった世の不正に対する不満が、よりよい人生を求める強い動機となる。ジョンに反抗した彼女が厄介払い同然に送られるローウッズの寄宿学校は、牧師ブロックルハーストが私費を投じて孤児を教育する慈善学校で、レベッカが契約生となったピンカートン女史の有名私立学校とは対照的である。ローウッズでは、虚栄心を克服し、忍耐力を身につけるという名目であらゆる経費が削られ、衣服も、食事も、暖房もなく、栄養不良の生徒達は、チフスの流行に次々と命を奪われる。自分の妻や娘には流行の華美な衣服を許しながら、生徒の自然の巻き毛も三つ編みの髪も贅沢として刈り込ませるキリスト者ブロックルハーストの偽善は、高名なジョンソン博士の「友人」と吹聴して世間の評判を得るピンカートン女史の虚栄にも通じる。もっとも、人格形成のうえで学校教育から何ら得ることなく卒業したレベッカとは異なり、ジェインは、この施設でヘレン・バーンズという新約聖書的な忍耐と寛容の精神を表す少女と深い友情を結び、また人格も知性も優れたテンプル先生の指導を受ける。そして、そこで生徒として六年、教師として二年を過ごす内に、「以前よりも調和のとれた考え、節度ある感情と思われるものが心に常に宿るようになった。義務と秩序に身を捧げ、静かで、満足していると思っていた。他の人の目には、そして大概は自分自身の目にすら、修養を積んだ控えめな人物と見えた」(JE, 116)。彼女はかつての激情や復讐心を抑制し、ヴィクトリア朝的価値観に沿うような女性へと変貌するのである。

このジェインはテンプル先生の結婚退職後、家庭教師となってローウッズを去るのだが、それは、ちょうど『虚栄の市』の冒頭でレベッカが置かれた状況と重なる。もっともレベッカが学校教育で何の人格的な変化、成長も見ず、従って、そうした学校生活の詳細にはふれずにそこを去る時点から物語に登場するならば、ジェインは自ら認めるように、周囲の環境から影響を受

け、知識の上でも性格や生活習慣の上でも大きな変化を遂げる。この小説において、伯母の家での生活や学校での出来事が細々と描きだされることも、これらの場所での経験がジェインの精神に与える重要性を強調することになる。とはいっても、自分の成長を語る先の引用で「～と思っていた」「～と見えた」という留保をこめた表現が示唆するように、ジェインの「成長」は完全なものではない。実際、ミス・テンプルがローウッドを去ったとたんに、彼女は自分の「生まれつきの感情」や「心を揺さぶるかつての思い」(JE, 116)が蘇ってくるのを感じ、新しい生活を求めてその州の『ヘラルド』紙に家庭教師の求職広告を出す。

「教育経験のある若いレイディ」(私は二年間教師をしていたのではないか)「十四歳以下の子女のある家庭に勤めたし」(やっと十八歳になったばかりだったので、自分の年齢に近い生徒の指導をするのはよくないと思ったのだ)「正規英国教育の一般科目、フランス語、絵画、音楽を教える資格あり」(読者の皆さん、当時はこのわずかな才芸の目録でも、かなり幅広いと考えられたのだろう。)(JE, 118-9)

当時、家庭教師の職を求める女性たちは、こうした広告文を新聞に載せることが多かった。ここで広告文の間に挟み込まれたコメントからは、当時の女性にふさわしい謙遜を見せながらも、二年間教師として働いた実績を持ち、身につけた教養の点では同年代の娘を教えるにも遜色のない優秀な教師であるとするジェインの自負が読み取れる。彼女は自分をレイディと呼ぶが、そのことは、久しぶりに出会ったベッシーの「お上品になられて、まるで貴婦人のようですわ」(JE, 123)という言葉でも証明される。この広告文に応じて雇用を申し入れた家政婦フェアファックス夫人の招きで、ジェインはミルコートのソーンフィールド館に赴任し、年収三十ポンドで主人のロチェスターが後見するアデルという十歳の娘の家庭教師を始めることになる。

ずばぬけた才能を持つわけではないけれども特別な欠点も持たず、ジェインを十分に慕って愛情を示すアデルと、穏やかなフェアファックス夫人の

好意に恵まれて、ガヴァネスとしては恵まれた日々を過ごしながら、ジェインはもっと生命力に溢れた生活を望み、胸苦しい思いにかられずにはられない。

「女はふつうはとても静かなものと思われている。でも、女だって男と同じように感じるのだ。能力を試し、努力する領域を欲しがるところでは兄弟たちと一緒にだし、制約が厳しすぎたり、完全な停滞に陥れば苦しむのも、男性と全く同じ。それなのに、より多くの特権を持つ男性が、女はプディングを作ったり、靴下を編んだり、ピアノを弾いたり、袋に刺繍をしたりするだけでよいと言うのは狭量だろう。慣習が女性にはこうあるべきだとする以上のことをしたがったり、学びたがったりするといつて、その人を非難したり嘲笑したりするのは愚かなことだ。(JE, 141)」

女性の有閑を「上品さ」の証と見たヴィクトリア朝にあつて、男性と女性の類似を強調し、女性が行為の上でも知的な面でも自由に活動すべきことを訴えるジェインの言葉は、フェミニズムの動きにも通じてかなり革新的だ。女性を閉じ込める慣習として彼女が挙げる編み物や音楽、刺繍といった「嗜み」は、家庭教師としての彼女が習得し、教えるべき教科の重要なもので、これらの価値を否定する彼女は、ガヴァネスという自己のアイデンティティを危うくしていることになる。しかし、彼女がこのような考えを持つにいたつたのは、優れた知性と教養を身につけ、しかも自立を余儀なくされたガヴァネスという立場ゆえでもあるのだから、この矛盾こそ、当時の女家庭教師の複雑な位置を表すものにほかならない。いずれにしても、玉の輿に乗って夫の財力や地位を支えにレイディとしての有閑の暮らしを望むレベッカ¹³⁾と、ジェンダーの役割を無視して男性と同じ自由な活動を望むジェインとは、ここにおいて大きな隔りがある。

このジェインの生の実感、活動への胸苦しい憧れは、館の主人であるロチェスターの出現によってひとつの方向を見出す。名門の次男と生まれた彼は、強欲な父と兄との陰謀でジャマイカの裕福な農園主の娘バーサと結婚するが、

彼女は身持ちが悪く卑しい性格の女で、狂気の血をひくことが分かる。間もなく父と兄が死んで、彼は莫大な遺産を相続するが、結婚生活は惨めで、しかも、妻が精神の病を発したために離婚もならず、悩んだ末彼は、妻をソーンフィールド館に幽閉し、別の女性と縁を結ぼうとする。理想の女性を求めて果たせず、自暴自棄となった彼は、かつて情婦としたフランス人女優の私生児アデルの家庭教師として館に赴任したジェインの真摯で純粋な魂に引かれて求婚、事実を知らないジェインもまた、彼に魂の伴侶を見出して、強く愛することになるのである。

家柄もよく裕福な「紳士」である主人ロチェスターとの結婚は、女家庭教師ジェインにとってはやはり身分違いのそれで、レベッカと同じく社会的上昇をめざす野心的な行為となる危険がある。実際、ロチェスターの花嫁候補で裕福な名門の令嬢ブランシュの話聞いたジェインは、すでに彼を愛しはじめ、彼の伴侶となる夢を見はじめていた自分に、

「おまえはソーンフィールドの主人と何の関係もない。ただ、あの方が後見する子供を教える代償に給料をもらい、勤めを果たせば、当然期待してよい丁重で親切な扱いに感謝するだけのこと。(中略) あの方はおまえとは身分が違う。身分をわきまえなさい。自尊心を持って、心と魂と力のすべてを注いで愛しても、それを求めず、むしろ蔑むであろうものに、そうした賜物を無駄につぎ込むのはやめよう。」(JE, 192)

と言いきかせて、主人との身分の違いを強調する。またブランシュは、女家庭教師を卑しい身分の「厄介者」(JE, 206)と蔑み、自分のガヴァネスを散々苛めた挙げ句にチューターとの恋愛を理由に屋敷から追い出したことを得々と語る。家庭教師の間でも恋愛が認められないのであれば、主人との結婚など望むべくもない。このブランシュの話は、当時多くの家庭で女家庭教師が経験したはずの苦境、すなわち、家族からの軽蔑、子供の悪戯、そして女性性の抑圧を明らかにするとともに、家柄も富も美貌も才芸も、レイディとしてのあらゆる条件を備えたかに見えるブランシュの冷酷さ、そして魂の

浅薄さを際立たせるのである。

ブランシュの内面世界の貧困を見たジェインは、打ち消そうとしていたロチェスターへの思いを新たにする。

あの方はあの人達と同じ類じゃない。確かに、あの方は私と同じなのよ。そうに違いない。私はあの方と同じ人間だと感じるわ。あの方の顔つきと動作が語る言葉が理解できる。地位と富とが私たちを大きく隔てているけれど、頭にも心にも、血にも神経にも、私をあの方に精神の上で同化させる何かがある。何日か前に私は言ったわ。あの方から給料を受け取る以外に繋がりはないと。雇い主として以外にあの方のことを考えるべきじゃないと。でも、それは自然に対する冒瀆よ! (JE, 204)

もちろん彼女は、自分の恋心は心の内に秘めて、決して明すまいと考え、主人との結婚を求めはしない。しかし、この彼女の言葉は、地位や富という社会的な価値に対する人間の内面世界、「本性／自然」の優位を主張することによって、彼女とロチェスターとの恋愛と結婚を、女家庭教師とその主人という社会階層の問題から切り離し、純粋な精神の問題へと移しかえることになる。『虚栄の市』において、レベッカが幸福への手がかりとしてあれほど求めた富と地位に代わって、ジェインの探究は人間の精神に向けられる。

社会的な地位も富も否定し、男女の性差をも否定し、ひたすら内面世界の充実だけを願うジェインの姿勢は、階層とジェンダーの狭間で苦悩してきた女家庭教師が自身を支えるために持たずにはいられなかった姿勢かもしれない。しかし、こうした姿勢が、既存の社会の秩序を揺るがすことは言うまでもないことで、それだからこそ、様々な悪行を重ねた末に殺人をも仄めかされるレベッカよりも、正義感が強く、自己抑制的なジェインの方を、当時の人々は危険な女として非難したのだろう¹⁴⁾。どのような悪行を重ねようと、地位と富を求め続ける限り、結局レベッカは社会の枠組みの中にとどまり続けるのに対して、ジェインはそうした枠組み自体を危うくしかねない存在なのだ。

作者も、こうしたジェインの持つ危険性を意識しないではいられなかったのだらう。ジェインとロチェスターの結婚を正当化し、社会の枠組みの内におさめるための様々な工夫を小説にほどこしている。第一に、ロチェスターの妻バーサの存在。先に示したバーサの履歴と人物像は、ロチェスターの告白によってのみ示されるのだから、そこに彼の偏見が込められている可能性もあるだろう。クレオールである彼女を淫乱と狂気に結びつけるその視点は、クレオールのスウォーツ嬢を軽蔑するレベッカと重なるもので、男女の役割分担に関してはジェインと同様自由な意見を持つ彼が、人種に関しては当時の文化の枠組みに染められていることを明らかにもする。しかし、いずれにしても、地位と金を求めた結婚の結果、狂人となって、ソーンフィールドの屋根裏部屋に閉じ込められた彼女は、いわば形骸化した結婚を象徴する人物といえる¹⁶⁾。その彼女は、ジェインが求めるロチェスターとの魂の交流をあざ笑うかのように、ことごとくに不気味な笑い声を屋敷に響かせ、その結婚を阻み、二人を遠ざけるのである。結婚の当日、バーサの兄の出現で事実が露顕したロチェスターは、すべてを告白した後に、法的な手続きを無視して愛のみに頼る生活を送ろうとジェインに訴える。社会からの完全な離反、逸脱をもたらすそのロチェスターの申し出は、男女間の平等な魂の交流のみを求めるジェインの結婚観、人生観が行き着く先であって、そうした彼女の思想の危険性を明らかにするだろう。彼女は、ロチェスターへの激しい情念に心を揺さぶられながらも、神の法に照らして彼の申し出を拒否する。このことは、彼女が抱くこの危うい情念を制御し、彼女の存在を社会の枠組みの内におさめるためのひとつの手段といえる。

一方、ロチェスターとの別離に続く牧師セント・ジョンとの出会いから求婚に至る物語は、宣教師として神の使命を果たすために、愛するオリヴァー嬢との結婚を振り捨て、愛してはいないジェインを伴侶に求める彼のキリスト者としての冷酷さ、身勝手さを強調し、あまりに厳格な信仰に優る愛情の重要性を明らかにして、ジェインとロチェスターとの最終的な結びつきの正

当性を主張するのである。神への献身を強く説くセント・ジョンの熱意に心を動かしそうになったその時、どこからともなく自分を呼ぶロチェスターの声を聞いて、ソーンフィールドに戻ったジェインは、館が火事で燃え、バーサが死んだことを知る。そして、ファーンデインの館でロチェスターと再会、彼への愛を再確認して、求婚を受けることになる。妻が死んでロチェスターは今や法的にも自由な身の上だが、さらに、火事で失明し、片腕をも失い、誰かの支えを必要とするよるべない身の上となっている。従って、ジェインが彼のもとにとどまり妻となることは、いわゆる看護婦として「家庭の天使」にふさわしい役割を果たすことになり、その正当性は二重の意味で社会から承認されることになる。この時ジェインが叔父の遺産を与えられて、働く必要のない身分になっていることも、身分違いの結婚という意識を取り除いて効果的だ。

このように、小説『ジェイン・エア』は、果てしなく拡大するロマンティックな情念を持つ女性が、富や地位、そしてジェンダーという社会的制約から自由ないま一つの共感する魂との結合を図る物語である。しかし、ジェインの理想の実現は、ある意味では危険なその情念を、様々な障害や試練を通して彼女が制御する術を身につけた後に初めてもたらされるのであって、その彼女の精神的発展の過程が、同時に強調されている。レベッカと同様、ジェインもまた、地位や富が人間の価値とされる社会の中で、その価値からはみ出した形で人生を始め、ガヴァネスとして社会の矛盾を実感し、社会に対する反発を強めてゆく。しかし、レベッカが自らそのような社会的価値を不当な手段で手に入れようとする中で、社会の矛盾を暴露してゆくのは対照的に、ジェインは当時の社会的価値と危うくバランスをとりながらも、それとは対照的な精神の価値を探究することによって、自己の実現を果たそうとする。ジェインの精神的成長の過程を辿るこの小説は、すでに論じたように、彼女の結婚を正当化するために様々な形で作者が介入することによって、主人公の内的「成長」の説得性を多少損なっているものの、それでも、十九

世紀に流行したビルドゥングズ・ロマンの形式を強く意識させる。『虚栄の市』が終始三人称で描かれ、語り手がレベッカとも彼女が挑戦してゆく社会とも距離を取って、両者を諷刺してゆくのに対して、『ジェイン・エア』が一人称で、ジェインの目を通した世界を示し、そのことによって、ジェインの精神の在り方を読者が実感できるように書かれることも、二つの小説の根本的な姿勢の違いを証明するだろう。

Ⅳ. ガヴァネス小説のゆくえ

『虚栄の市』と『ジェイン・エア』。この同じ年に出版され、同じ女家庭教師をヒロインとし、同じく社会の矛盾を糾弾する二つの小説は、すでに見たように、最終的に小説の形態も、作品のテーマも、ヒロインの運命も、またヒロインに対する語り手や読者の持つ共感の在り方も全く異なったものへと展開してゆく。これらの相違は、もちろん作家の資質もあるだろうが、『虚栄の市』が男性、そして『ジェイン・エア』が女性によって書かれたというジェンダーの差にもよるだろう。ガヴァネスの問題が当時のジェンダーの問題と深く関わっていたことの証しでもある。自身も家庭教師であったシャーロット・ブロンテは女家庭教師ジェインに深い共感を示しており、社会的、性的価値の狭間におかれたガヴァネスの苦悩を教育による精神的な価値の実現という形で解決することを提案した。しかし、ジェインの思想が男女の役割分担や社会階層の違いという既存の文化の枠組みを打ち壊してしまう可能性のあることはすでに述べたとおりで、その事に対する根本的な解決はこの小説では示されていない。ただ、ヒロインのジェインに深い共感を寄せながらも、彼女を、様々な試練に合わせ、その危険な欲望を制御し、社会の規範と辻褃を合わせることでバランスを取ろうと努力する作者の苦闘が見え隠れするだけである。一方、レベッカは、金と地位とが支配する社会の枠組みに反発し、モラルの枠組みを越えて悪行を重ねる明らかな悪女でありながら、あくまでも社会的な成功を求める点で、結局は社会の枠組みの中にとどまり

続ける。その意味で、ヒロインとしてのレベッカはジェインほどの革新性は備えていない。しかし、本来社会の枠組みからはみ出したピカロであるべき彼女と、彼女が接触する社会の住人の双方を、同じ「虚栄」にとらわれた等質なものとして等しく諷刺する過程で、作者は、金や地位、そして名誉といった十九世紀社会を成り立たせる様々な価値を覆し、その欺瞞性を暴き出す。しかも、そうした強烈な諷刺の結果、社会のあらゆる価値を否定した挙げ句に、当時の人々にとって究極的な価値の拠り所であった善悪の区別や道徳、さらには神の正義さえをも無価値なものとして打ち崩す、きわめてシニカルかつ虚無的な世界観を提示することになるのである。

このように、主人公と語り手、あるいはその背後に潜む作者の価値観、世界観においても、『ジェイン・エア』と『虚栄の市』とは対照的な像を結ぶ。しかし、ガヴァネスを描く過程で、異なる資質の作家が二人ながらに作品の中に一種の矛盾、分裂を呼び込み、既存の価値観や社会の枠組みを危うくする要素を取り込まずにはいられなかったことは、彼らが描き出す女家庭教師という存在自体がはらむ問題性をいっそう浮き彫りにする。実際、こうした矛盾、あるいは破壊性は、十九世紀のガヴァネス小説には共通のもので、『ジェイン・エア』や『虚栄の市』と同じ年に出版され、同じく女家庭教師をヒロインとするいまひとつのガヴァネス小説『アグネス・グレイ』もまた、同様の問題点を露呈している。

自活を強いられた牧師の娘アグネスが、引退した商人で裕福なブルームフィールド家とホートン・ロッジの地主マリ家に家庭教師として赴任し、手に追えない子供たち、親の無理解、身分の不安定さに苦悶する様を、作者自身の経験を交えて等身大に描くこの物語は、『ジェイン・エア』においてイングラム嬢の言葉に示される当時のガヴァネスの窮状を、ガヴァネス自身の視点からリアリスティックに表したものだ。金や富、社会的な地位の点で優位に立つ雇い主の虚栄や無知、そして精神的貧困が女家庭教師の目を通して次々と明らかにされる点で、ヒロインの道德観という点では対照的ながら、『虚栄

の市』と通じてもいる。

しかし、『アグネス・グレイ』において特徴的なのは、主人公の恋愛、あるいは結婚が、いわゆる雇い主との身分違いのそれとはなっていない点であろう。アグネスの母親は地方の大地主の娘で、家族の反対を押し切って牧師と結婚し、一族から絶縁される。父親は聖職禄に加えて僅かながら財産も持っていたが、自分のために裕福な暮らしを捨てた妻や娘達の将来を思う焦りから、友人の貿易に出資して失敗、負債を抱える。こうしたアグネスの生い立ちは、母親が同じく身分違いの結婚をして、両親が亡くなった後に自立を迫られたジェインと共通する。しかも、ガヴァネスとして赴任した二つの家庭での職務や家族についての詳細な描写に加えて、アグネスもまた、ジェインと同じく、ひとりの男性に対する恋愛の苦悩とその成就とを語ることになる。レベッカが社会的成功を得る唯一の手段として結婚による成り上がりをめざしたのに対して、ロチェスターとの純粋な魂の共感と結合だけを求めるジェインに成り上がりの野心はない。しかし、レベッカとジェインという二人のガヴァネスにとって、その恋愛と結婚に社会階層が重要な意味を持つことはすでに見たとおり。ところが、『アグネス・グレイ』においては、そうした成り上がり問題は、女家庭教師であるヒロインから切り離され、むしろ、その雇い主でアグネスの教え子であるマリ家の長女ロザリーが負うことになる。「あの人が悪い人間でも構わないわ。むしろいいぐらいよ。あの人が嫌いでも——誰かの妻にならなきゃならないなら、アシュビー荘園の女主人になるのに異存はないわ」と公言し、美貌を武器に貴族の地位と財産を求めてアシュビー卿と愛のない結婚をしたロザリーは、不道德で嫉妬深く威圧的な夫と高慢な姑との確執に不幸な結婚生活を強いられるのである。このロザリーの野心は、高い知性と高潔な精神を持つ牧師ウェストンの愛を得て、幸福な家庭を築くアグネスの道徳性と鋭い対照をなし、ともすれば成り上がりを狙う危険な存在と見られがちな女家庭教師の、ジェントルウーマンに対する精神的優位を主張するのである。

しかし、このように、階層という障壁を取り払われたアグネスの恋愛は、そのために女家庭教師が直面せざるを得なかったいまひとつの重要な問題を炙り出すことにもなる。つまり、女性のセクシュアリティ抑圧の問題である。教区牧師ハットフィールドとの戯れの恋が終わりを告げた後、望みどおりアシュービー卿との婚約を果たしながら、ロザリーは、気儘な独身時代の最後の楽しみとして教区の副牧師ウェストンに恋を仕掛ける。アグネスが密かに彼を慕っており、その彼女にウェストンも好意を持っていることを承知のういでロザリーが示す手練手管にたけたコケットリー。それを目の当たりにして、嫉妬と不安に揺さぶられるアグネスの内面世界が、彼女自身もはつきりとは捉えられない、いわゆる無意識的側面をも含めて、彼女の口から詳細に語られるのである。たとえば、村までの散歩の途中に偶然ウェストンに出会って、愛想を振りまいた挙げ句に、「彼の心臓を撃ち抜いてやったわ」(AG, 138)と得意気に語るロザリーの言葉を聞いて、アグネスが激しく動揺する場面を引いてみよう。

私はまず発作的にベッドの側の椅子に身を沈め、枕に頭を横たえ、激情に身を任せて涙をぼろぼろ流すことで気を楽しにしようとした。思うさまそうせずにはいられなかったのだ。しかし、ああなんということだろう。私はそれでも自分の感情を抑えつけ、呑み込まなければならなかった。ベルの音が、教室での夕食を告げるあのおぞましいベルの音が鳴ったのだ。私は下へ降りていって、穏やかな顔で、微笑み、声を挙げて笑い、馬鹿話をし、しかも、そうだ、食事さえも取らなければならない。もつとも、そんなことができればだが (AG, 138)

「まず発作的に (my first impulse)」 「激情に身を任せて涙をぼろぼろ流し (a passionate burst of tears)」 「思うさまそうせずにはいられない (an imperative craving for such an indulgence)」 と重ねられる言葉づかいが、ウェストンに対するアグネスのほとんど理性を越えた情念の激しさを明らかにする。夕食を告げるベルの音に、いつもどおり「穏やかな顔で微笑」まね

ばならない自分の欺瞞的な立場を「おぞましい」と言う彼女は、ガヴァネスという立場が彼女に強いる抑圧の厳しさを鋭く意識しているのである。婚約という社会的保証の蔭で、道徳や秩序を完全に無視して表されるロザリーの奔放な性への欲望。それを厳しく批判し、常に信仰と道徳を重んじ、感情を抑え、ウェストンへの恋すら「あの方が好きなのではなく、あの方の善良さを愛しているのだ」(AG, 139)と考えるアグネスは、一見そうした性的欲望からは全く自由な存在と見える。しかし、ガヴァネスの彼女が食事の代わりに「呑み込まねばならない (swallow back)」その激情は、食欲に代わるいまひとつの欲望、おそらくは彼女自身も意識していないであろう女性としてのセクシュアリティが、様々な道徳的抑制を強いられた女家庭教師という立場のゆえに一層激しい形をとって、その魂の奥底に潜んでいることを露呈している。

このように、『アグネス・グレイ』は、十九世紀英国社会を広大なスケールで諷刺的に描いた『虚栄の市』やゴシック的な雰囲気をもんだ『ジェイン・エア』に比較して、自身も家庭教師としての経験を持つ作者の実際の体験を数多く取り入れた写実的な作品で、ヒロインの人物造形も、野心家のレベッカや情熱的なジェインに比べて、当時の女性に関する一般の理念を体現するステレオタイプ的な女性となっている。その点で、強烈な個性と躍動感に溢れたヒロインを持つ他の二作品よりも、小説としての面白さは劣るといえるかもしれない。しかし、すでに見たように、最も常識的と見えるこの小説もまた、ガヴァネスを描く過程で、当時の文化的、社会的枠組みを揺るがす要素を読者に提示しているのである。しかも、『虚栄の市』や『ジェイン・エア』が示す階層やジェンダーといういわゆる外面的な要素ではなく、むしろ、最も自己抑制的で穏健なヒロインを持ち、当時の価値観を遵守し、体制的と見える『アグネス・グレイ』のほうが、かえって、女性のセクシュアリティという、ヒロインの存在の最も奥深い部分に(たとえ未だ不十分な把握の仕方であったとしても)踏み込んでいっているのだ。女家庭教師

という存在、そして、それを描くことが、いかに、当時の社会の問題点を暴き出す触発的なテーマであったかが分かるだろう。

この階級と性の狭間に存在する女家庭教師の問題は、十九世紀をとおして様々な変貌を遂げながら英国小説の主要なテーマの一つとして書き続けられる。そして、1898年、ヘンリー・ジェームズの『ねじの回転』において、屋敷の主人に対する抑圧された情念と、教師としての強烈な使命感や道徳観の狭間で引き裂かれて、遂にはその幼い生徒を死に追いやるガヴァネスの、陰惨な告白の物語へと発展する。雇用に際してたった二度会っただけで、以後の一切の接触を拒絶し、あらゆる責任を彼女に委ねたまま姿を見せない不在の雇い主に望みのない密かな恋心を抱き、彼が後見する二人の子供たちの養育係としてブライ邸に赴いた「若く、未経験で、神経質な」¹⁷⁾女家庭教師。ガヴァネスとのみ語られて、名前も持たない彼女の手記を中心に形作られるこの物語では、彼女の手記を幾重にも包み込む入れ子細工のような語りの構造が、息苦しいまでに閉ざされた語り手の、しかも自己のアイデンティティという確かな中心を欠いた、不安な自意識の有り様を象徴的に表している。道徳的で義務感に満ちたヒロイン、その彼女の雇い主への恋、二面性を持った子供、赴任先での孤独と過酷な抑圧から逃れるためのヴィジョン——ガヴァネス小説を特徴づけてきた要素のすべてを取り込み、そこに「ねじのひとひねり」を加えたこの作品は、伝統的なガヴァネス小説についての小説、いわゆるメタフィクションの要素も含んでいる。さらにそこには、『虚栄の市』『ジェイン・エア』『アグネス・グレイ』という同じ年に出版された三つのガヴァネス小説が指し示したような、階層と性との狭間にある彼女達の抑圧された欲望の内面化の過程の行き着く先が示されてもいるのである。『ねじの回転』において「女家庭教師」が見た幽霊が実在のものか、あるいは彼女の妄想なのか、批評家の議論は尽きない。しかしそこに出現する幽霊は、社会や自己が抱え込んだ様々な矛盾によって厳しい抑圧を強いられてきた女家庭教師という存在が、そうした抑圧との葛藤の果てに、現実からの逃避の手段

として必然的に辿り着いたひとつのトポスにはかならない。

注

- 1) たとえば、『二都物語』(1859)のチャールズ・ダーニーはフランスを去った後、英国で語学教師として生計を立て、『白衣の女』(1860)では、語り手の一人でもあるウォルター・ハートライトは絵の教師だが、チューターと呼ばれる男性の家庭教師とは少し立場を異にしており、その社会的地位や職業自体が物語の中で問題となることは少ないといえるだろう。
- 2) 英国における男子の教育については、Asa Briggs, "Thomas Hughes and the Public Schools," *Victorian People* (Harmondsworth: Penguin, 1980), 148-175, 長島伸一『世紀末までの大英帝国近代イギリス社会生活史素描』(法政大学出版局, 1987), 井村元道『英国パブリックスクール物語』(丸善ライブラリー, 1993)参照。
- 3) 「ガヴァネス」は、元来「子供の世話をし、監督する女性」という漠然とした意味で用いられていたものが、18世紀を境にその意味が廃れて、「子供を教育する女性」という意味を新たに獲得することになったのだが、「ミストレス」は、14世紀頃から「女性教師」の意味で使われている(OED)。つまり、「ガヴァネス」は、元来子供の生活面での世話を主な職務としていたのが、18世紀になって、「ミストレス」と同様、何かを教える教師としての側面がむしろ強調されるようになってきたということだろう。
- 4) 「ガヴァネス」という言葉が女家庭教師に使われるようになったひとつの理由は、「チューター」と並んで男性の家庭教師を、とりわけ主に王家や貴族など上流の家庭の家庭教師を指すものとして用いられていたいまひとつの語、「ガヴァナー(governor)」との連関もあるだろう。この「ガヴァナー」という言葉が男性の家庭教師の意味で用いられた最終例が1788年と記され、女性の教師に「ガヴァネス」の語が使いはじめられた頃とほぼ時期を同じくしていることも、「ガヴァネス」という語の意味変化に影響しているように思われる。さらに、「ミストレス」が女性の学校教師を指すようになったのは、男性教師全般を指していた「マスター(master)」の語が、徐々に学校教師の意味で使われるようになったことと関連があるだろう。
- 5) 川本静子、『ガヴァネス——ヴィクトリア朝の<余った女>たち』(中公新書, 1994)。「ガヴァネス」の歴史に関しては、川本静子、前掲書に加えて、Alice Renton, *Tyrant or Victim? A History of the British Governess* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1991) (邦訳、『歴史のなかのガヴァネス』(高科書店, 1999) 河村貞枝訳)も参照した。もっとも、主に文学作品を意識した川本静子が有能で知的なガヴァネス像を提示するのに対して、レントンは、歴史的資料に基づい

て、愚かでヒステリックなガヴァネスの否定的な側面を強調する。

- 6) 西村(河村)貞枝は「ヴィクトリア時代のフェミニズムの一考察—ガヴァネスの問題をめぐる」『史林』56巻 2号(1973), 84-118で, J.A. and Olive Banks, *Feminism and Family Planning in Victorian England* (Liverpool, 1964)の研究を踏まえながら, 1851年から1871年に至る20年間に15歳以上の独身女性が16.8%も増加した事実を指摘している。
- 7) この間の社会的事情に関しては山口みどり「ヴィクトリア時代のガヴァネスと女子教育改革」『三田学会雑誌』89巻 2号(1996)158-180 参照。
- 8) 『虚栄の市』と『ジェイン・エア』, 及び『アグネス・グレイ』をガヴァネスの観点から論じたものに, 川本静子『ガヴァネス』, Mary Poovey, “The Anathematized Race: The Governess and *Jane Eyre*,” in *Uneven Developments: The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England* (Chicago: University of Chicago Press, 1988), 126-163があり, 多くの示唆を得た。
- 9) William Makepeace Thackeray, *Vanity Fair* (Harmondsworth: Penguin, 1985), 40. 以下, *Vanity Fair* からの引用はすべてこの版により, 引用文の末尾に *VF* と略記して引用ページ数のみを記す。
- 10) もちろんレベッカに対する周囲の人々に否定的な反応は, プレンキンソップが言うように, セドレイ夫人宛ての手紙を盗み見たり, アミアリアの持ち物をこっそり自分のものにしようとするレベッカの野心や道徳心の欠如に対する批判ともとれる。しかしレベッカを非難する彼らの言葉自体がまた, 彼女に対する批判の根源に金の問題があることを露呈してもいるのである。
- 11) ジョスの死因については, はっきりとした記述はなく, ただ, レベッカが夫アガメムノンを殺すクリュタイムネーストラーを迫真の演技で演じて見せたことや, それにまつわる挿絵, そして瀕死の床にあるジョゼフがドビンに, 「君は彼女がどんなに恐ろしい女か知らないんだ」(*VF*, 795)ということから, レベッカが彼を殺害したのではないかという疑惑を読者に喚起するのみである。しかし, ジョン・サザランドはこの件に関してレベッカは潔白であることを論じている。Cf. John Sutherland, “Does Becky kill Jos?” in *Is Heathcliff a Murderer? Puzzles in Nineteenth-Century Literature* (Oxford: Oxford University Press, 1996), 66-72.
- 12) Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (Harmondsworth: Penguin, 1985), 44. 以後 *Jane Eyre* からの引用はすべてこの版により, 引用文の後に *JE* と略記して引用ページ数を記す。
- 13) クローリー卿の死後, 勘当を解かれたレベッカは, 義兄ピット氏が相続したクイーンズ・クローリーの館で, しばらくの間, 穏やかな有閑夫人の暮らしを経験する。その彼女は「田舎紳士の奥様なんて, 難しいことじゃないわね。(中略)私だって善良な女になれるわ, 年に五千ポンドの金があれば。子供部屋でぐずぐずして,

塀の杏を数え、温室の植物に水をやり、ゼラニウムの枯れ葉を摘むなんてお安い御用よ。」(VF, 495)と言って、ジェイン同様、有閑の暮らしに物足りなさを覚える。しかし、そうしたレイディとしての暮らしや、さらにはそうしたジェントルウーマンが持つべき人間の善良さえもが、金銭によって生み出されるとして、五千ポンドという途方もない金額を求める彼女は、ジェインとは対照的に激しい社会的上昇の野心を見せることになるのである。

- 14) メアリー・ブーヴェイは、『虚栄の市』と『ジェイン・エア』という二つのガヴァネス小説を論じた Lady Eastlake, "Vanity Fair—and Jane Eyre", *Quarterly Review* 84 (1848), 153-85を引用しつつ、レベッカの「不道徳性」にもかかわらず、ジェインの方を「下品な心を持つ」と断じて強く批判するイーストレイクの議論に、女家庭教師をめぐる読者の階級制度の転覆に対する不安や、当時理想とされた女性像を危うくする女のセクシュアリティの問題を読み取っている。Mary Poovey, *Uneven Development*, 126-163
- 15) サンドラ・ギルバートとスーザン・グーバーは、バーサを家父長制に閉じ込められ、そこから逃れようとするジェイン自身の魂、すなわち、「閉じ込められた『飢餓、反抗心、怒り』」の象徴と見て、両者の分身関係を論じている。Cf. Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, "A Dialogue of Self and Soul: Jane Eyre" in *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (New Haven: Yale University Press, 1979, 1984), 336-371. 確かに、バーサの暴力性は、幼少時のジェインの激しい怒りに通じるものがあるが、金と美貌を兼ね備え、愛のない結婚を求めたバーサは貴族の令嬢イングラム嬢にも通じる存在で、ジェインの本性の表象というよりは、家父長制そのものが内包する暴力性や破壊性を象徴する存在といえるのではないか。
- 16) Ann Brontë, *Agnes Grey* (London: Oxford University Press, 1971), 80. 以下の引用はすべてこの版により、AGと略記して引用文の後にページ数を示す。
- 17) Henry James, *The Turn of the Screw* (New York: W.W. Norton & Company Inc., 1966), 6.